

彙報 ('69.1~'69.12)

○京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告として、水野清一編『メハサンダ』が3月に刊行。○会員の著書として刊行されたものには、薮内清『中国の天文暦法』（8月）、羽田明『西域』（河出書房刊、世界の歴史、2月）がある。また樋口隆康『インドの仏跡』（3月）、『北京原人から銅器まで』（12月）がある。さらに淡交社刊の『世界の宗教』シリーズには、米田治泰ほか『永遠のイコン—ギリシア正教』（8月）、谷泰ほか『愛と裁き—カトリック』（6月）、岩本裕『布施と救済—大乘仏教』（11月）、吉田光邦『啓示と実践—イスラム』（9月）がふくまれている。○会員の動静としては萩原淳平が第3回アジアアルタイ学会出席のため台湾に8月後半渡航し、○井上智勇は8月から9月にかけて第5回西洋古典学会議のためヨーロッパに出張、○松平千秋は9月末から10月半ばまでヒューマニズムのシンポジウムのために、ギリシア及びドイツに渡航した。○泉井久之助は3月、京都大学文学部教授を退官、同じく○薮内清も人文科学研究so教授を退官した。

○大学紛争は一応の収まりをみせたけれども、本誌の刊行はなかなかおくれをとりもどせず、ようやく69年度分をNo.22の1冊としてお届けできる運びとなった。○編集部の方力の至らなかつたことを深くおわび申しあげる。○加えて物価の上昇にともない、本誌の印刷についても多くの困難が増大してきつつある。会員諸兄姉の御援助をこころからおねがいしたい。○71年中には何とかして70年度分を刊行し、明年早々にでも暦年度に合致させることを念願している。○同時に本学会の意義についてもさらに深省が求められよう。○なお編集部の手不足のため、会員動静が京大関係にとどまってしまったことをおわび申しあげる。